

TEM (複線径路等至性モデリング) の新たな理論的展開

——記号圏とイマジネーション理論を踏まえて——

宮下 太陽¹⁾・上川 多恵子²⁾・サトウタツヤ³⁾

(立命館大学大学院人間科学研究科/株式会社日本総合研究所/未来社会価値研究所¹⁾・

立命館大学大学院人間科学研究科²⁾・

立命館大学総合心理学部³⁾)

本研究の目的は、記号論的文化心理学に立脚した方法論である TEA (複線径路等至性アプローチ) において根幹をなす手法である TEM (複線径路等至性モデリング) の理論的發展に寄与することである。本稿では TEM の分岐点の分析を豊饒化させることにつながる概念としてヴァルシナーの域的記号、ロトマンの記号圏、ジトゥンのイマジネーション理論について整理した。次に、TEM の基本概念である必須通過点 (OPP)、分岐点 (BFP)、等至点 (EFP) と記号圏及びイマジネーション理論を接合した上で、記号圏において記号が記号として機能する諸条件を包括体系的セッティングと記号的プロトコルとして概念化し、既存のセッティングとプロトコルに揺らぎが生じるきっかけとなる記号を発生促進的記号 (PSG) として定義した。その上で、新たに定義した概念を組み込んだ記号圏における TEM のイマジネーションモデルを提示し、必須通過点分岐点に変容する現象を記号論的に読み解く道筋を示した。また記号圏と研究対象者の関係に着目する観点から TEM 研究の整理を行い、個人内での時間的移行に留まらず、記号圏をまたぐ個人間の空間的移行についても TEM を用いて研究しうる可能性を示した。

キーワード：記号圏、イマジネーション、包括体系的セッティング、記号的プロトコル、
発生促進的記号

立命館人間科学研究, No.44, 49-64, 2022.

はじめに

記号論的文化心理学に立脚した方法論である複線径路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach, 以下 TEA) は、人間を開放システムと捉え、時間を捨象せず時間経過とともにある人間の文化化の過程を記述する研究手法の統合的体系である。TEA は多様な径路をモデリングする方法である複線径路等至性モデリング (Trajectory Equifinality Modeling, 以下 TEM)、対象選定の理論である歴史的構造化招待

(Historically Structured Inviting, 以下 HSI)、変容過程を構造化する方法である発生の三層モデル (Three Layers of Genesis, 以下 TLMG) から構成される (サトウ 2015a; サトウ 2015b; サトウ 2017; 安田 2019)。

宮下他 (2021) は、TEA を非可逆的な時間の流れの中で、等至点にいたるまでの人と記号との相互作用過程を、実存的に記述する研究手法であると捉えた上で、TEA の根幹をなす記号概念を考察するために、パース (Peirce) の記号論、ヴィゴツキー (Vygotsky) の記号の三角形、ヴァルシナー (Valsiner) の促進的記号 (promoter

sign) について検討した。その上でこれらを包含する形で、記号、主体、対象、解釈項¹⁾を各頂点とする記号の三角錐 (sign triangular pyramid) を定義した。記号の三角錐とは底面の三角形のそれぞれの点を記号、対象、主体としたうえで頂点を解釈項とするもので、人と記号との相互作用を文化として捉え、カイロスの時間²⁾としての「いま・ここ」で起こっているありようを分析し、研究を進める際の基本単位である。

本稿では、この理論モデルを踏まえ、TEM をより豊饒化させるための方法論を考察する。TEM における記号概念をどのように精緻化させ、TEM の中で人と記号の相互作用過程をどのように記述することが、より深く現象に迫ることにつながるのか、すなわち TEM を豊饒化することにつながるのかを明らかにすることが本稿の目的である。

TEM では等至点 (EFP)、必須通過点 (OPP)、分岐点 (BFP)、非可逆的時間という基本概念が整備されている (サトウ他 2006)。Zittoun & Valsiner (2016) は、TEM を未来へ向けた絶え間ないプロセスにおける境界域 (boundary) の概念とした上で、TEM こそが発達システムの意味を理解する Minimal Gestalt³⁾ であると定義している。また TEM は一つひとつの実例に基づいて一般化を図る方法であるとし、過去から未来へと続く時間軸の中で、予期せぬ驚き (surprises) が発生する分岐点と、そこで生じる未来に向けた複数の選択可能な人生径路間での緊張関係 (tensions) を調整する (coordinating) ツール

(tool) としてのイマジネーション (imagination) の重要性を指摘している。イマジネーションにより、過去の経験も想起しながら、未来に向けた複数の人生径路間の緊張関係を、今現在の文脈における実際の経験という新しい形に変えていくことができるのである。

このことは、TEM の研究において必須通過点をたどってきた径路が、何らかのきっかけにより分岐点に直面し、複数の選択肢が生じるポイントに着目することの重要性を示唆しているといえる。記号論的文化心理学における重要な概念である社会的表象 (social representations)⁴⁾ の提唱者であるモスコヴィツシ (Moscovici)⁵⁾ も表象の変容過程の重要性を指摘している。モスコヴィツシは社会的表象について、人間の共同の行為とコミュニケーションの産物であり、それがいったん個人々の内部へと位置づけられ、個人々人を規定するようになると、社会的表象は、あたかも物的な存在のように立ち現れてくると指摘した上で、現象をより容易に把握できるのは、変容の過程においてであり、だからこそ社会的表象の出現に関心を集中するのだと述べている (Moscovici 2001)。

本稿では、TEM における記号概念を精緻化するために、必須通過点に分岐点に変容するポイントについて焦点をあて、そこでの人と記号との相互過程を明示的に織り込んだ TEM の新たな理論的展開を提案する。

そのため、まず記号に関する重要な諸概念の中で、TEM における分岐点の分析の豊饒化につな

1) 解釈項 (interpretant) とはパースの用語で記号が作り出す効果のことを指す (内田 1986)。
2) 人が感じる意義深い質的な時間の流れで、時計時間 (クロノスの時間) とは異なる質的な時間のこと (サトウ 2019a)。
3) Minimal Gestalt とは最小の形態またはユニットと訳しうるもので分析の最小単位を意味し、ヴィゴツキーに依拠して用いられている。ヴィゴツキーは、心理学を要素 (elements) に分解する方法から単位 (units) に分解する分析方法に変えなければならないと述べている (Выготский 1934=2001:18)。

4) ヴァルシナーは、記号的媒介としての文化という捉え方を強調した上で、記号的媒介の一つの形式は社会的表象の使用であると述べている (Valsiner 2007=2013)。
5) モスコヴィツシはフランスの社会心理学者である。モスコヴィツシは、我々が知覚し経験する世界に出会うのは表象を通してのみであると述べ、あらゆる社会的表象の目的は、私の目の前にある何か馴致されていないもの (the unfamiliar) を、馴致されたもの (the familiar) に変換することであると指摘した (Moscovici 2001)。

がると考えられる概念について整理する。具体的には、ヴァルシナーの域的記号 (filed-like sign), ロトマン (Lotman) の記号圏 (semiosphere), ジトゥン (Zittoun) のイマジネーションを取り上げ、取り上げるべき理由と共に論じる。

次にヴァルシナー (2018) が提示する TEM の基本単位を基点として、記号概念とイマジネーションを発展的に統合する形で新たな理論モデルを提案した上で、その考え方を踏まえた TEM 研究の整理と発展可能性について検討する。

I. TEM における分岐点を豊饒化させる

記号概念

1. ヴァルシナーの記号概念

現代における文化心理学の代表的理論家の一人であるヴァルシナーは、記号が表象する内容には2つの形式があると論じている (Valsiner 2007=2013)。一つは点的記号 (point-like sign) で記号が表す内容の質的均質化を図るための記号であり、もう一つが域的記号で記号が表す内容の質的多様化を許容する記号である (サトウ 2019a)。

ヴァルシナーは域的記号の例として、社会という概念を取り上げ、われわれの思考と感情に全面的に浸透している更一般化された記号 (hyper-generalized sign) であると述べている (Valsiner 2007=2013)。更一般化された記号とは、人間の情緒的現象の記号的媒介レベルの階層において最高次のレベルにあり、容易に言語化することができないレベルにある記号である。われわれは、自分の価値に方向づけられて決然と行為できるが、その価値が何であるかを他者と話すとなるとうまくいかないこともある (Valsiner 2007=2013)。

ヴァルシナーはこのような域的記号は文化的に構築されたわれわれの心のどこにでもあって記号圏を形成すると述べている。記号圏の概念

については、生物界との類似性から援用した生物圏 (biosphere) の対概念で、ホリスティック (全体論的) なフィールド概念であり、その異種混濁性 (heterogeneity)⁶⁾ に特徴があると指摘している (Valsiner 2007=2013)。

2. ロトマンの記号圏

記号圏とはロシアの文学・文化研究者であるロトマンにより提唱された概念で、芳賀 (1998) によれば、記号が機能する記号空間全体を記号現象の一単位として捉える考え方であり、以下のように定義される。

記号圏とは、「言語が存在し機能するために不可欠な記号論的空間であって、異なる諸言語の総体ではない。ある意味で、記号圏は先立つ存在であり、言語と絶えず相互作用している (the semiotic space necessary for the existence and functioning of languages, not the sum total of different languages; in a sense the semiosphere has a prior existence and is in constant interaction with languages)。」(Lotman 1990:123, 著者訳)⁷⁾。

また、記号圏と文化の関係については以下の様に述べられている。

「記号圏の空間は文化の発展の前兆であり、その結果である (Semiospheric space is the precursor to and the result of cultural development)。」(Lotman 1990:125, 著者訳)。

以上のことから、記号圏とは記号が記号として働く前提条件であり、人と記号の相互作用が機能するための必要不可欠な領域として捉えることができる。もし記号圏が存在しなかったり、記号が異なる記号圏にあったりする場合は、記号が記号として働かないということになる。

6) 異種混濁性とは、異質な要素が混じり合いながら存在していること。パフチンに依拠すれば、異質な要素同士が衝突し補完し合っており、そのすべてがシステムの中で役立てられているポリフォニー的状况である (Engeström 1987; 田島 2019)。

7) 重要な引用については、読者の有用性を鑑み日本語訳に後に英文を記載した。

この記号圏の概念はTEMにおいては必須通過点と接続する。必須通過点とは、人生径路や人間の発達において、必ず経験する出来事や突きつけられる行動選択のあり様を捉える枠組み(サトウ他 2006)であり、必須通過点の種類には、制度的通過点、慣習的必須通過点、結果的必須通過点がある⁸⁾(安田 2015b)。必須通過点がそれとして機能するのは、ある記号圏において特定の記号が記号として働いている結果と捉えることができる。記号が記号として十全に作用していることで、人の行動に揺らぎが生じず、必ず通過するポイントとなっているのである。

必須通過点が多岐点に変容する記号論的プロセスを捉える上で、必須通過点を必須通過点たらしめている前提条件としての記号圏に着目することは非常に重要である。ある記号圏における記号と人の相互作用の中で、人がどのように新しい意味を生成するのかをTEM図を通してより明示的に記載できればTEMの豊饒化につながるという。

記号圏における記号と人との相互作用中で、必須通過点が多岐点へと変容するポイントに焦点をあて、そこで起こっている記号現象をより深く理解するためにはジトゥンのイメージネーション理論が有用である。

3. ジトゥンのイメージネーション理論

ジトゥンらは文化を人と記号の相互作用として捉えた上で、人の文化的・一歴史的発達に着目する際に重要となるのが、未来や過去、そして別の経験について想起することができるイマジ

ネーション⁹⁾であると指摘している。

「人は時間のスナップショットの連続ではなく、常に進化している生命体であり、その過去と未来は常に変容(拡張, 縮小, 再編成, 修正)している。ライフコースの中での人の発達は、過去や未来、そして代替的な人生についてのイマジネーションの発達でもある。そして、そのようなイマジネーションは、その人のライフコースが実際にどのような形になっていくのかという点で、根幹的な役割を果たしている (a person is not a series of snapshots in time, but a constantly evolving organism, his or her past and his or her future are also constantly transformed – extended, reduced, reorganized, revised. The development of a person during her life course is also the development of her imagination of her past, future, and alternative lives. And such imagination has a fundamental role to play in the actual shape that a person's life course will take)。」(Zittoun et al. 2013:54, 著者訳)

ジトゥンはイメージネーションを「いまーここ (here and now)」の直接的設定 (immediate setting) から切り離しループする記号論的プロセスと捉え、トリガー (triggers)、リソース (resources)、アウトカム (outcomes) を構成要素とするモデルとして図1の通り概念化している (Zittoun & Gillespie 2015)。ジトゥンによるイメージネーションの定義は以下の通りである。

「イメージネーションとは、現在、過去、あるいは副次的な経験を通して集められた様々な素材が資源として動員され、利用されることで、感情的で具現化された経験を形にする記号論的なプロセ

8) 制度的必須通過点は、法的な拘束力のある法律や、そこまでの強制力をもたずとも社会的・制度的な縛りとなるもの(義務教育など)。慣習的必須通過点は、社会もしくは特定の集団において持続的に共有されてきた規範性のある生活上のならわしで、個人の行動様式として捉えられるもの(七五三など)。結果的必須通過点は、ある出来事の帰結として必然のありようのように理解しうること(被災にともなう居住地の変更など)として捉えられる(安田 2015b; 安田 2019)。

9) イマジネーション概念には日本語の想像力だけでなく、構想力という意味合いも込められており、創造的な側面がある。ジトゥンらは想像力(imagination)と創造性(creativity)は密接に関係しており、想像力は創造性の中心にある心理学的プロセスであると述べている(Zittoun & Gillespie 2016)。

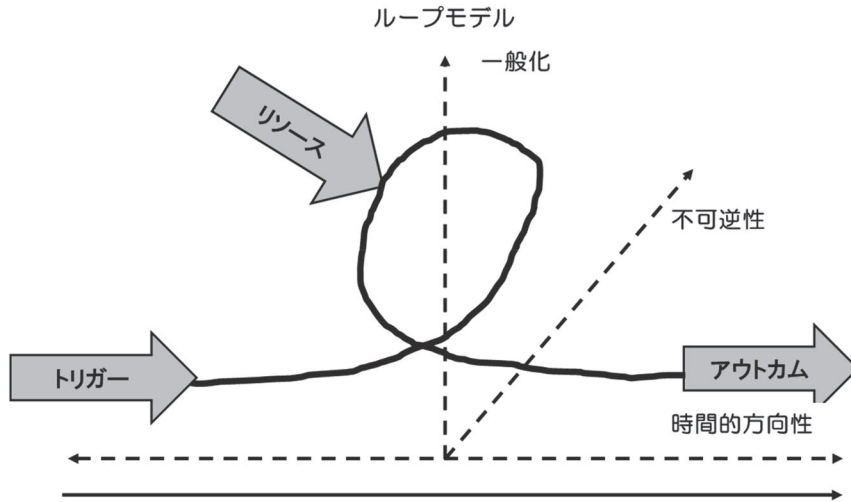


図1 ループモデル：ループとしてのイマジネーション（Zittoun & Gillespie 2015）

スである（Imagination is a semiotic process by which various materials collected through present, past, and vicarious experiences is mobilized and used as resources, to give shape to an emotional, embodied experience）。」（Zittoun & Gillespie 2016:231, 著者訳）。

トリガーとは経験の近位圏（proximal sphere of experience）からの切り離しを引き起こす（provoke）ものであると定義されている（Zittoun & Gillespie 2016）。ジトゥンはトリガーとなる可能性があるものとして、第一に突発的事項（ruptures; 例えば国を出なければならぬこと、職を失うこと、宝くじがあたることなど）、第二に退屈または過剰刺激の状況（situations of boredom or overstimulation; 例えば退屈な授業を聞いたり、皿を洗ったり、日常的な通勤時間を過ごしたりすること）、第三に課題を解決したり解決策を見つけたりする必要がある状況（solve a task or a find a solution; 例えば創造的な作業、執筆、ブレインストーミングなど）、第四に自発的の離脱（voluntary uncoupling; 映画を鑑賞することや、本を読むことなど）などを挙げている（Zittoun & Gillespie 2015）。

ジトゥンはイマジネーションのループは様々

なりリソースの上に構築されていると述べている。想像するための最も典型的な資源は、過去の経験や個人的な記憶であり、例えば昔住んでいた家を思い出すことで、子どもの頃の様々な様子が浮かび上がってくるといったような場合である。その他のリソースとしては、象徴的な資源（書籍、雑誌、映画、または他の文化的な成果物）、社会的表象（共有されたアイデア、規範、価値観）、対人関係などが挙げられている（Zittoun & Gillespie 2016）。

またアウトカムとはイマジネーションループが完了した結果であり、様々な規模や方向性を持ちうるものである。（Zittoun & Gillespie 2016）。

ジトゥンのイマジネーションの概念は、TEMにおいては分岐点と接続する（後述）。文化を人と記号の相互作用として考えるなら、分岐点は人と記号の間にある種の緊張が生じるポイントであるといえ、その緊張を調整する作用をするのがイマジネーションだといえるのである。ジトゥンはイマジネーションと分岐点の関係について、以下の通り述べており、イマジネーションの結果として新しいライフ（生命・生活・人生）の形が生まれることを指摘している。

「ライフコースの研究は、イマジネーションが、

与えられた経験の領野の中に、また、それらを横断して、分岐点に現れることを示唆している。しかし、それに加えて、ある特定の遠位にある経験の領野の結果は、新たな可能性のある経路を創造することである。言い換えれば、イマジネーションの結果は、ライフの新たな形態の創造であるかもしれない (The study of life courses suggests that imagination appears in given spheres of experiences, across them, and in bifurcation points. Yet in addition, the outcome of certain distal spheres of experience, is to create new possible pathways. In other words, the outcome of imagination might be the creation of new real forms of life)。] (Zittoun & Gillespie 2015:107, 著者訳)。

ここで遠位の経験 (distal experience) というのは、「今—ここに」にしばられている近位の経験 (proximal experience) から切り離された経験のことである。例えば毎日の忙しい日常から離れて10年後のありたい姿をイマジネーションすることで、今の仕事を辞めて新しい仕事を始めるといったことが想定される。

TEMにおいて、分岐点におけるイマジネーションの働きをより明示的に記載できればTEMの豊饒化につながるといえる。

II. TEMの記号圏を規定する セッティングとプロトコル

1. TEMの基本単位

記号圏がTEMの必須通過点と接続するありようについて、TEMの基本単位を踏まえた上で理論的検討を進める。ヴァルシナーは図2の通り分岐点に中心をおいた図をTEMの基本単位 (basic unit) として提示しており、解釈項が生まれる場所であると述べている (Valsiner 2018)。

TEM図を作成する際、研究者はまず自身の知りたいことを等至点として定め、等至点を基点としてHSIによりインタビュー対象者を選定する。インタビュー対象者の語りを通じてTEM図を作成していく際に、まず研究者が自覚的に意識する必要があるのは、研究対象となる記号圏である。すなわち研究対象者が記号との相互作用の中でそう行動するように仕向けられているものは何かということであり、研究者が研究の対象とした記号圏において、どのような必須通過点が想定されるのかということである。TEMの新たな理論的展開を考える上で、ロトマンの記号圏はその手掛かりを与えてくれる概念となる。

記号圏に埋め込まれている必須通過点について、パースに依拠して考えると、最終的解釈

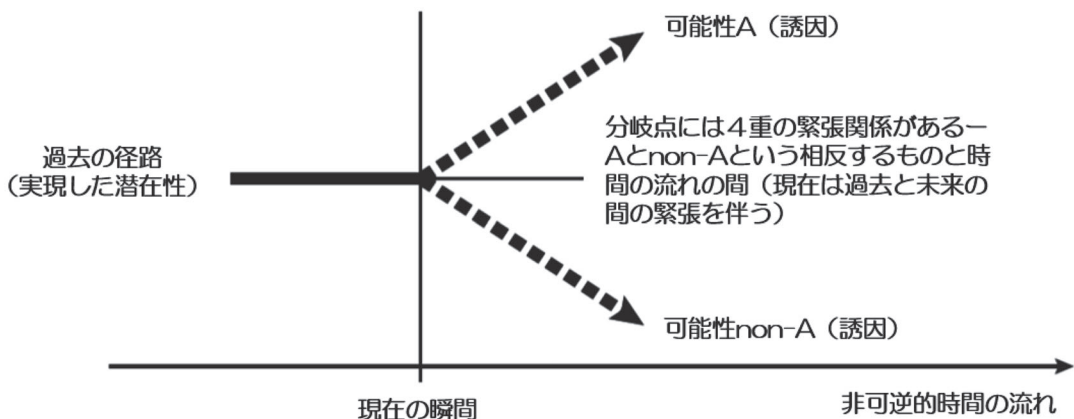


図2 TEMの基本単位 (The basic unit of TEM; Valsiner 2018)

項¹⁰⁾が主体（研究対象者）に対して、特定の状況において特定の行動を要請することが現前している状況であり、研究対象者は特に疑問を挟むことなく、受け身的に必須通過点を経験している状況といえる。これは記号の三角錐において、解釈項が主体に対して内化しきっている状況であり、例えば木戸（2011）が指摘した日本における「受身的化粧」などは、その具体的な現象として挙げられる。次節では記号と人との相互作用において記号の三角錐が成立しているありさま、つまり研究対象者にとって記号が記号として十全に機能している、そして、- TEMを用いて描いたときには-必須通過点が必須通過点として受容されている現象をより理解を進めるための新たな概念を提示する。

2. 包括体系的セッティングと記号的プロトコル

TEMにおけるセッティングとは研究者が研究の対象とした記号圏において、記号が記号として働くための諸環境を指す。ある記号圏において繰り返し立ち現れる特定の諸環境（場・状況）のことを、本稿では包括体系的セッティング（systemic setting）と定義する。包括体系的セッティングにおいては、必須通過点が必須の径路として機能することが期待される。

また、プロトコルとは一般的に複数の者が対象となる事項を確実に実行するための手順について定めたものである¹¹⁾。本稿では、上記の包括体系的セッティングにおいて、諸環境が記号に完全な効果を発揮させることを許した場合に、

10) 最終的解釈項とはパースの用語で諸環境がその記号に完全な効果を発揮させることを仮に許すとすれば、任意の心にその記号が造り出すであろう効果のこと（de Waal 2013）。記号に効果を発揮させる諸環境がセッティングであり、記号が作り出す効果の内実がプロトコルと整理できる。

11) プロトコルは一般用語としては外交儀礼や通信規約という意味で用いられる。外交儀礼としてのプロトコルは歴史的外交事例に基づいた慣行や慣習を整理し成文化したものであり、法的な拘束力はない。まさに本稿でいう記号的プロトコルそのものである。

つまり記号が促進的記号として十全に作用した場合に、人が通常とることが要請される行動継起（シークエンス）のことを、記号的プロトコル（semiotic protocol）と定義する。記号的プロトコルとは、「記号圏において、必須通過点が登場として機能した際に、主体に要請される一連の行為の束」である。

TEMにおけるセッティングとプロトコルについて、具体的な例を示して説明を行う。例えば、会社組織におけるオフィシャルな飲み会を例にあげると、「オフィシャルな飲み会」という場が包括体系的セッティングであり、その場で期待される以下のような定型的なパターンが記号的プロトコルである。

- ・会の冒頭にしかるべき人物が乾杯の音頭をとる。
- ・乾杯は全員に飲み物が行き渡ってから行う。
- ・乾杯するまでは、飲み物に口をつけてはいけない。
- ・遅れてきた人が合流したら、もう一度乾杯を行う場合がある。
- ・会の最後は、乾杯の音頭を取った人とは別のしかるべき人物が締め挨拶を行う。
- ・上席者から順に退席する。上席者が帰るまで帰ってはいけない。

なお、上記例においては、初めの乾杯と最後の締めの挨拶が必須通過点となる。こうしたプロトコルは、日本の会社の飲み会、もしくは日本の飲み会というセッティングでのみ要請されることであり、海外から来た人が参加すると違和感を覚えることが多い¹²⁾。この違和感は記号圏におけるセッティングとプロトコルと受け手とのずれにより生じるものであり、記号論的文化心理学における研究のきっかけや研究設問につながることも多い。

12) 新型コロナウイルスの影響で従来型の飲み会が減少した一方、オンライン飲み会という現象が広まっており、そこでは新たなセッティングとプロトコルが生成されている。

次節では TEM の分岐点とイメージーションの接続について整理する。

Ⅲ. TEM における分岐点とイメージーション

人が人生において経験を積み重ねていく中で、記号圏から要請されたり時に仕向けられたりしている必須通過点をそのままの形で甘受できないことがある。こうした、必須通過点における記号からの要請をそのまま受容できないポイントこそが、分岐点となる。分岐点において、ヴァルシナーは過去と未来、A と non-A の可能性において緊張 (tension) が生じると述べているが、そこでの緊張を調整するツールこそがイメージーションである (Valsiner 2018; Zittoun & Valsiner 2016a)。

ジトゥンは人と現実との相互作用を“経験の領野 (sphere of experience)”と呼んでいる (Zittoun & Gillespie 2015)。経験の領野とはある種の社会的 (物質的・象徴的) な設定の中で反復的に発生する経験、活動、表象、感情の構成を意味し、人が定期的に従事する可能性のある様々な規則的で安定した経験のパターンの一つである。また、経験の領野には主に現実との関りを必要とする近位の経験と、主に想像の中に存在する遠位の経験がある (Zittoun & Gillespie 2015)。

ジトゥンによれば、人があるトリガーによって、「今—ここ」の現実にしばられている近位の経験から離れて、遠位の経験にループし、代替的な別の可能性に思いをはせる力がイメージーションであり、そのプロセスに影響を与えるものがリソースである。分岐点における緊張が昇華し、イメージーションループが近位の経験に再結合 (rejoin) するとアウトカムが生まれる (Zittoun & Gillespie 2016)。

ここでジトゥンのイメージーション理論と TEM との理論的接続について改めて整理する。

まずトリガーはヴァルシナーのいう促進的記号として捉えることができる (Valsiner, 2004)。ヴァルシナーは促進的記号について、現象学的には個人的な価値志向として深く内化され、作用するとしている (Valsiner 2007=2013)。

このように促進的記号とは人を何か新しいことへ導く記号のことだが、TEM の分岐点においては、トリガーは分岐点を引き起こす記号、必須通過点分岐点に変容するきっかけとなる促進的記号と整理することができる。本稿ではトリガーを、分岐点を生み出す「発生の促進的記号 (promoter sign of genesis) として概念化する。

発生の促進的記号を検討する上で、イメージーション理論におけるリソースが手掛かりとなる。TEM では分岐点に影響を与える文化的社会的な力として、荒川他 (2012) は、等至点に近づけるように働く力を社会的助勢 (Social Guidance, 以下 SG), 等至点から遠ざけるように働く力を社会的方向づけ (Social Direction, 以下 SD) と概念化している。この方向や大きさのある SD や SG をリソースとして整理することができる。また、安田 (2015) は、同様の力であっても時間的な経過のなかで、SG になることもあれば SD になることもあると指摘している。ジトゥンはイメージーションにおけるリソースとして、前述の通り第一に痕跡や過去の経験、記憶、第二に象徴的な資源、第三に社会的表象、第四に対人関係などを挙げているが、等至点との関係においては同じリソースが SG にも SD にもなりえるといえる。SG, SD を分岐点におけるイメージーションに影響を与えるリソースとしてより明示的に記載することが TEM の豊饒化につながるといえる。

アウトカムは、TEM の等至点と接続する。分岐点で選択肢が生まれた後、最終的にイメージーションループが再結合した結果が等至点といえる。ジトゥンはイメージーションの結果、個人

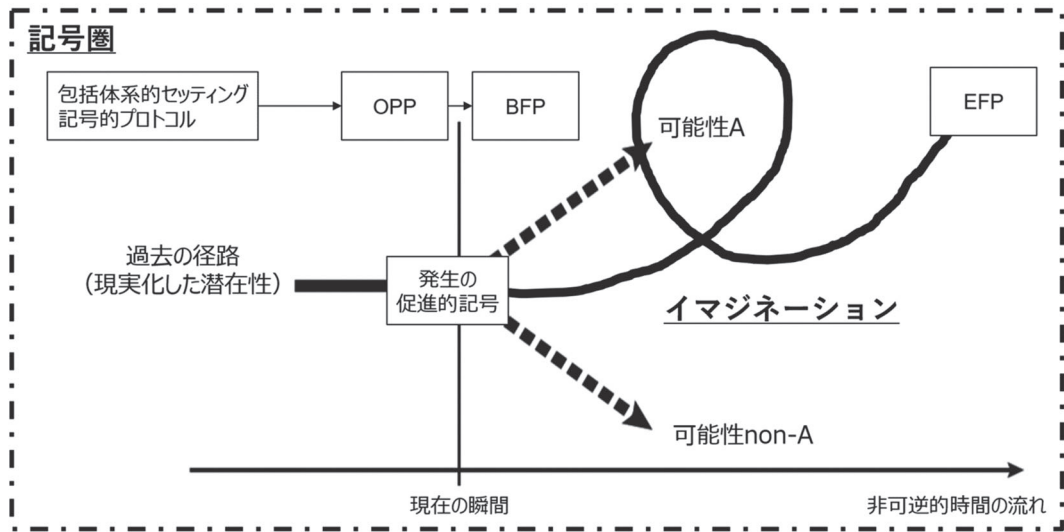


図3 記号圏における TEM のイマジネーションモデル (著者作成)

の経験や世界との関係性が変化したり、代替的なシナリオを想像することで個人の経験が豊かになったりする可能性がある」と指摘している (Zittoun & Gillespie 2015)。等至点に至る過程での個人の経験の変化や、シナリオの複線性についてはまさに TEM 研究で扱うテーマといえる¹³⁾。

TEM の新たな理論的展開を考える上で、イマジネーションは分岐点から等至点にいたる人と記号の相互作用過程をより詳細に説明しうる理論といえる。

IV. 記号論的文化心理学に立脚した TEM の新たな理論的展開

1. TEM のイマジネーションモデル

ここまでの議論を踏まえて、図2の TEM の基本単位に図1のイマジネーションのループモデルを発展的に統合する形で記号論的文化心理学に立脚した TEM のイマジネーションモデル

を提示する (図3)。

ヴァルシナー (2018) が提示した TEM の基本単位 (図2) からの理論的増分は、以下の3点である。まず TEM が研究対象とする範囲を明確に意識するために TEM の対象範囲を規定する外枠として「記号圏」という概念を取り入れた点である。

次に研究対象となる記号圏において「包括体系セッティング」と「記号的プロトコル」により形成される必須通過点の変容するポイントが分岐点であることを明示し、そのきっかけ (トリガー) となる記号を「発生の促進的記号」として概念化した点である。

最後に分岐点における人と記号との相互作用について、具体的なありようを記述するためにジトゥンのイマジネーション理論との接続を図った点である。

いずれも記号論的文化心理学の方法論として TEM における記号概念を精緻化することにより、TEM の豊饒化につながると考えている。

ヴィゴツキーは、複雑な心理過程全体を分析する方法として、分析される全体とは全く異なる質の産物である「要素」に分解する方法を批判

13) TEM において等至点へと至る動的で多様な有り様は、ZOF (Zone of Finality) として概念化されている (安田 2015a)。

した上で、全体に固有な基本的特質のすべてをそなえ、それ以上は分解できないような産物である「単位」を分析する必要性を主張した(Выготский 1934=2001)。TEM もまた、図3で示した全体像を分析の基本単位として意識することにより、個別に要素だけに着目するような還元主義に陥らずに、人生径路の理解を深めるためのミクロ(個人の経験)–マクロ(記号圏)の往還が可能になる。

2. TEM のイマジネーションモデルから見た TEM 研究の整理と発展可能性

図3で示した全体像を意識することで、TEM を用いた研究の特徴を整理することができる。記号論的文化心理学の研究対象は研究対象者と記号の相互作用そのものであると考えることができるが、研究対象者と記号圏の關係に着目すると、研究者の研究設問の立て方により TEM 研究は大きく2つの観点から整理できる¹⁴⁾。

一つは包括体系的セッティングの観点から、研究対象者にとって既存のセッティングか新規のセッティングかという観点で整理できる。これは記号圏の視点で考えると、研究対象者と既存の記号圏との相互作用に着目した研究であるのか、それとも新たな記号圏との相互作用に着目した研究であるのかという整理である。また、この観点においては、新たな諸問題に人が直面する場合などそもそも記号圏が成立していない状況も想定される。

もう一つは記号的プロトコルの観点から、研究対象者が直面するプロトコルを受容するかプロトコルから離れるかという観点で整理できる。これは記号圏の視点で考えると、研究対象者が結果として記号圏に留まる現象に着目した研究であるのか、それとも記号圏から離れる現象に

着目した研究であるのかという整理である。

上記の2つの観点より TEM 研究は図4の通り類型化される¹⁵⁾。

また、研究対象者と記号圏、セッティング、プロトコルとの關係性をより明示的に表すと図5の通りとなる。なお図5において、Sはセッティング、Pはプロトコルのことであり、それぞれアルファベットの大きい文字と小さい文字を用いて表現している。

類型Ⅰは既存の記号圏の記述に焦点をあてた研究であり、例えば未婚の若年女性の中絶経験(安田他 2008)や保育者と子どもの關係構築過程(上村 2018)を分析する研究、コスプレという現象に焦点をあてた研究(福山 2021)などが挙げられる。

類型Ⅱは既存の記号圏からの離脱に焦点をあてた研究であり、例えば児童自立支援施設退所者の高校進学後の社会適応過程(河合他 2016)や終身雇用が根強い社会におけるキャリア転換(宮下 2019)を分析する研究などが挙げられる。

類型Ⅲは新たな記号圏との衝突に焦点をあてた研究であり、例えば異なる音韻圏における名乗り方の種類と人間關係構築への影響(進藤他 2021)など、異なる異文化コミュニケーションや異文化理解に関する文脈における葛藤や軋轢を分析する研究などが考えられる。

類型Ⅳは新たな記号圏の受容に焦点をあてた研究であり、例えば米国に留学した女子学生の化粧行為の変容過程(木戸 2011)や中国人日本語学習者の敬語使用における葛藤と受容(上川 2017)、社会人経験がある看護師の葛藤と受容(伊東 2017)などを分析する研究などが挙げられる。

類型Ⅴは新たな記号圏の生成に焦点をあてた研究であり、例えば被災者が災害からの復興に

14) 研究を行う研究者がどの記号圏に属しているのかという点も重要な観点になるが、研究者と研究対象者との關係については改めて別の場で論考する。

15) すべての TEM 研究が図4のいずれかの類型に当てはまる(1対1で対応する)ということではない。それぞれの類型が複数組み合わせられた研究も当然ありうる。

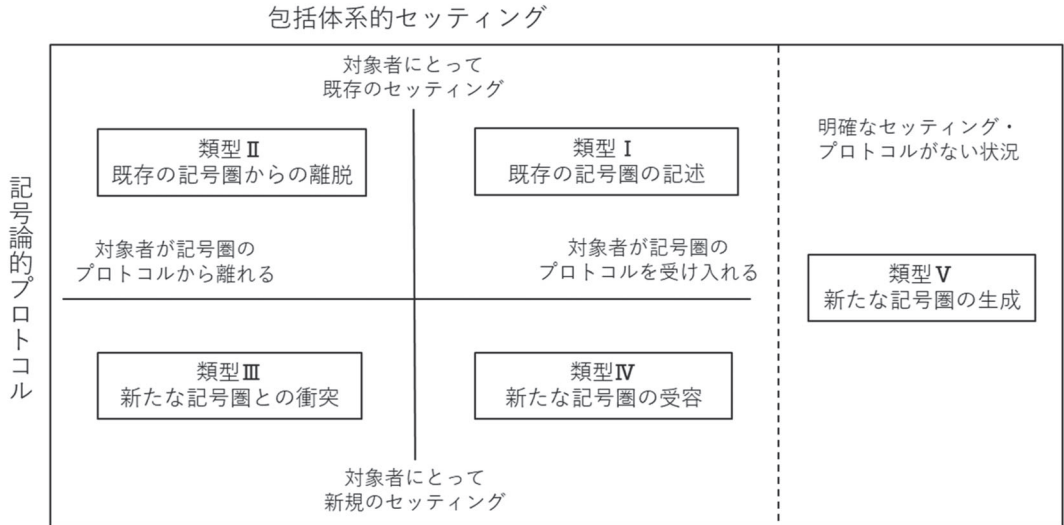


図4 TEM研究の類型（著者作成）

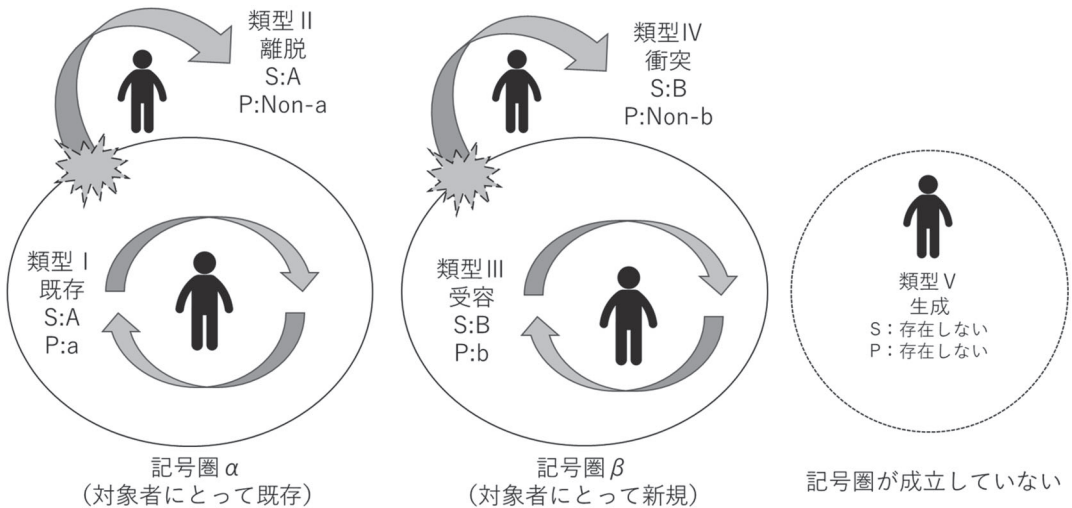


図5 TEM研究の類型（著者作成）

向かうプロセス（河本 2021）や、結婚を機に生活を共にする夫婦が新たな生活スタイル（食習慣）を築いていく過程（上川他 準備中）を分析する研究、新型コロナ禍における新たな生活様式の確立を分析する研究などが考えられる。

また類型ⅣやⅤの研究については複数の記号圏を並列的に取り扱う研究の可能性を開いている。心理学的な方法論である TEM は主に個人と記号との相互作用過程に着目する研究アプ

ローチになりがちであるが、類型ⅣやⅤの観点に立ち、複数の記号圏を並列的に扱う意識を持つことで、個人内に留まらず異なる記号圏に属する個人間の相互作用過程を TEM の研究テーマとして扱うことができるようになる。この方向性は、個人内の時間的移行（トランジション）を主に扱ってきた TEM 研究において記号圏をまたいだ個人間の空間的移行（トランジション）に焦点をあてた研究が成立する可能性を示して

いる。バフチンの研究者である田島 (2019) によれば、バフチンは他者の視点により慣習化された世界の意味が再発見されることを「異化¹⁶⁾」と呼ぶが、その具体的な方法論として TEM を活用することの意義を見出せるのである。このように研究における包括体系的セッティングと記号的プロトコルを明示することで、研究者が着目している人と記号との相互作用過程を明確化することができ、TEM による研究、ひいては質的研究をより豊饒化することができると考えている。

おわりに

本稿では、ヴァルシナーの記号概念、ロトマンの記号圏、ジトゥンのイマジネーション理論を手掛かりに記号論的文化心理学の方法としての TEM の新たな理論的展開について考察した。記号論的文化心理学は、人と記号との相互作用を文化として捉えることを基盤としており、TEM はその中でも実存と過程に重点を置いた方法論である (サトウ 2019b)。

TEM で描かれる等至点へと至る人と記号の調整過程において、改めて記号圏及び記号圏を構成している包括体系的セッティングと記号的プロトコルに着目することで、研究者自身が研究対象とする記号現象とより自覚的に向き合うことができることを示した。

宮下他 (2021) が提示した記号概念の基本単位である記号の三角錐に即してより具体的に述べれば、研究者が記号現象に自覚的になるということは、三角錐の頂点である解釈項から主体

へと要請されている諸力を明確にするということであり、研究の対象とした記号圏における必須通過点のありようをセッティングとプロトコルの観点から丁寧に記述するということである。そうすることで、必須通過点そのものや必須通過点分岐点に変容するポイントをより豊かに記述することができる可能性がある。

サトウ (2017) は、生物は記号を用いることで、今・ここに縛られないコミュニケーションが可能になるが、最も洗練されているのがヒトであることは疑う余地がないと指摘した。そのうえで、生物としてのヒトは、記号の交換を通じて外界とコミュニケーションを行なうという意味でオープンシステムであると論じている。

神崎・サトウ (2015) は人間を - 環境から孤立した閉鎖したシステムとしてではなく - 外界と常に交流・相互作用しているオープンシステムとして捉える考え方が TEA の特徴であると述べた上で、オープンシステムは絶え間なく外部環境と物質を交換し影響を受けながらも、その構造や機能を定常状態に保とうとすると述べている。一見安定しているように見えるが実はそうではなく動的な平衡状態にあるというのは、生物学者である福岡 (2007) がシェーンハイマーに依拠して「生命とは動的平衡にある流れである」と定義した生命観であり、人をオープンシステムとして捉える TEA の考え方と共鳴・共振するものである。

本稿では、TEM における記号概念を精緻化することで、ある文化において人が必ず経験する出来事や突きつけられる行動選択のあり様である必須通過点¹⁷⁾が、実は分岐点となりうる潜在的な可能性、すなわち必須通過点と分岐点の記号論的な表裏一体性を浮き彫りにした。オープンシステムにおいて、必須通過点とは絶対的なものではなく、一定の諸条件のもとに動的な平衡状態として成立しているにすぎない。では、動的な平衡状態にある必須通過点はどのような

16) 異化について、田島 (2019) はバフチンのダイアローグ論に引き寄せて、「異質な他者とのダイアローグに巻き込まれることで、このよそ者の視点から見慣れた自分の世界の意味やイデオロギーを自覚的に読み解き、またそれらの情報を鵜呑みにせず否定的な再評価を下しうる内的ダイアローグが、個々の話者において賦活すること」と定義している。

場合に分岐点に変容しうるのか。その変容プロセスを理解する際に重要になるのが、必須通過点を必須通過点たらしめている諸条件に着目することであり、それが本稿でいう TEM の新たな理論的展開への着目に他ならない。

ヴァルシナーは、2019年9月の日本質的心理学会の講演で、拡張された現在 (The extending present) において、SGとSDがせめぎ合っている接触面 (Contact surfaces) と目的発生領域 (TELEOGENETIC Zone) のありようを深く掘り下げることの重要性を指摘した (Valsiner 2019)。ヴァルシナーによれば、SGとSDのインパクトのもとにある、分岐領域 (bifurcation zone) における未来の可能性と過去を調整する目的発生的プロセスを特定することが、TEAの次なる理論的課題である (Valsiner 2019)。

本稿で示した、記号が記号として働くための諸環境 (包括体系的セッティング) と、その際に要請される一連の行為の束 (記号的プロトコル) に自覚的になることが、ヴァルシナーの言う TEA の次なる理論的課題への取り組みに向けたアプローチの一つとして貢献できれば幸いである。

なお、分岐点に焦点をあて、記号との相互作用により変容する人間の内的メカニズムを理解するための理論として、TEAではTLMG (発生の三層モデル) が用意されている。安田 (2015) は、TLMGについて、個人の内的変容を、個別活動レベル、記号レベル、信念・価値レベルの3つの層で記述・理解するための自己モデルであると述べており、サトウ (2015) は記号の層において、新たな促進的記号が発生していることが分岐点だと指摘している。さらに、サトウ (2016) は分岐点を分析する手法として、ジトゥンのイマジネーション理論に依拠し、横軸に時間 (未来-過去)、縦軸にイマジネーションの方向性 (促進的-抑制的) をおいて現象を捉える

クローバー分析を提案している¹⁷⁾。本稿で提示した TEM のイマジネーションモデルと TLMG の関係、またそれらを踏まえた TLMG の発展可能性など、分岐点での現象に焦点をあてたクローバー分析等の具体的な分析手法に関する理論的考察については今後の検討課題としたい。

引用文献

- 荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ (2012) 複線経路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一例. 立命館人間科学研究, 25, 95-107.
- В ыготский, Л. С. (1934 / 2001) Мышление и речь / Л. С. Выготский, Мышление и речь, М., Лабиринт ヴイゴツキー, Л. С. 柴田義松 (訳) (2001) 思考と言語. 新読書社.
- de Waal, C. (2013) *Peirce: A Guide for the Perplexed*. Bloomsbury Academic.
- Engeström, Y. (1987) *Learning by Expanding: An Activity-Theoretical Approach to Developmental Research*. Cambridge University Press.
- 福岡伸一 (2007) 生物と無生物のあいだ. 講談社現代新書.
- 福山未智 (2021) コスプレという現象-心理学と家政学の架橋的研究-. 日本質的心理学会第18回大会 (オンライン).
- 芳賀理彦 (1998) 「記号圏」: 文化記号論における集成的概念. 多民族国家における多文化主義の成立と展開: 言語・文学・教育・宗教・文化をめぐる諸問題. 千葉大学大学院社会文化科学研究科, 223-232.
- 市川章子 (2017) 台湾人のアイデンティティ再考——複線経路等至性モデリングを用いて——. 対人援助学研究, 7, 75-88.
- 伊東美智子 (2017) 社会人経験を経た看護学生の学びほぐし. 安田裕子・サトウタツヤ (編) TEM でひろがる社会実装—ライフの充実を支援する. 誠信書房, 第2章, 第1節, 69-88.
- 上川多恵子 (2017) 中国人日本語学習者の敬語使用. 安田裕子・サトウタツヤ (編) TEM でひろがる社会実装—ライフの充実を支援する. 誠信書房, 第1章, 第1節, 26-48.
- 17) 市川 (2017) は幼少期に文化を越境した人のライフストーリーを分析するに際し、クローバー分析を活用した研究実践を行っている。

- 上川多恵子・宮下太陽・安田裕子・サトウタツヤ (準備中) 夕食の場をコミュニケーションの場と考える夫婦の食習慣に対する歩み寄り.
- 上村晶 (2018) 保育者と子どもの関係構築プロセスを可視化する試み. 桜花学園大学保育学部研究紀要, 17, 13-30.
- 神崎真美・サトウタツヤ (2015) 開放システムと形態維持. 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編) TEA 理論編——複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ. 新曜社, 14-18.
- 河合直樹・窪田由紀・河野荘子 (2016) 児童自立支援施設退所者の高校進学後の社会適応過程—複線径路・等至性モデル (TEM) による分析—. 犯罪心理学研究, 54, 1, 1-12.
- 木戸彩恵 (2011) 日米での日本人女子大学生の化粧行為の形成と変容—文化の影響の視点から. 質的心理学研究, 10, 79-96.
- 河本尋子 (2021) 災害から生活復興に向かうプロセスと内的変容に関する一考察: 複線径路等至性アプローチを用いた東日本大震災の事例分析. 常葉大学社会環境学部研究紀要, 7, 21-32.
- Lotman, Y. (1990) *Universe of the Mind: A Semiotic Theory of Culture*. London: I. B. Tauris.
- Moscovici, S. (2001) *Social Representations: Explorations in Social Psychology*. NY. New York university press. 18-77.
- 宮下太陽・サトウタツヤ (2019) キャリア多様化の時代におけるプロ人材への変容とキャリア転換. 日本心理学会第 83 回大会 (立命館大学大阪いばらきキャンパス).
- 宮下太陽・上川多恵子・サトウタツヤ (2022) TEA (複線径路等至性アプローチ) における記号概念の考察——パース, ヴィゴーツキー, ヴェルシナーを手がかりに. 立命館人間科学研究, 44, 15-31.
- Peirce, C.S., パース著作集 2 記号学. 内田種臣 (編訳) (1986) 勁草書房.
- サトウタツヤ (2015a) 複線径路等至性アプローチ (TEA). 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編) TEA 理論編——複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ. 新曜社, 4-8.
- サトウタツヤ (2015b) 複線径路等至性アプローチ. 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編) TEA 実践編——複線径路等至性アプローチを活用する. 新曜社, 4-7.
- サトウタツヤ (2016) 複線径路等至性アプローチ (TEA) ——分岐点分析の新技术としてのクローバー分析. 日本質的心理学第 13 回大会 (名古屋市立大学).
- サトウタツヤ (2017) TEA (複線径路等至性アプローチ) とは何か. 安田裕子・サトウタツヤ (編) TEM でひろがる社会実装—ライブの充実を支援する. 誠信書房, 序章, 1-11.
- サトウタツヤ (2019a) 時間と記号. 木戸彩恵・サトウタツヤ (編) 文化心理学——理論・各論・方法論. ちとせプレス, 第 4 章, 41-51.
- サトウタツヤ (2019b) 質的研究法を理解する枠組みの提案. サトウタツヤ・春日秀郎・神崎真美 (編) 質的研究法マッピング ——特徴をつかみ, 活用するために. 新曜社, 序章, 2-8.
- サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・高田沙織・ヤーン・ヴァルシナー (2006) 複線径路・等至性モデル——人生径路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して. 質的心理学研究, 5, 255-275.
- 進藤あおい・隅本雅友・サトウタツヤ (2021) 異なる音韻圏における名乗り方の種類と人間関係構築への影響. 日本質的心理学第 18 回大会 (オンライン).
- 田島充士 (2019) ダイアログのことはとモノログのことは. 福村出版.
- 上村晶 (2018) 保育者と子どもの関係構築プロセスを可視化する試み. 桜花学園大学保育学部研究紀要, 17, 13-30.
- Valsiner, J. (2004) The Promoter Sign: Developmental Transformation Within the Structure of Dialogical Self. Paper presented at the Symposium (Hubert Hermans, Convener). Developmental aspects of the dialogical self ISSBD, Gent, July 12, 2004.
- Valsiner, J. (2007) *Culture in minds and societies: Foundations of cultural psychology*. California: SAGE Publications. ヴェルシナー, J. サトウタツヤ (監訳) (2013) 新しい文化心理学の構築——〈心と社会〉の中の文化. 新曜社.
- Valsiner, J. (2018) Facing the Future— Making the Past, Marsico, Giuseppina. *Beyond the Mind: Cultural Dynamics of the Psyche*, Information Age Publishing, Incorporated, 55-63.
- Valsiner, J. (2019) 日本質的心理学会講「REMAINING ELEGANT: Fifteen years of qualitative psychology in Japan」.
- 安田裕子・荒川歩・高田沙織・木戸彩恵・サトウタツヤ (2008) 未婚の若年女性の中絶経験——現実的制約と関係性の中で変化する, 多様な径路に着目

して. 質的心理学研究, 7, 181-203.

安田裕子 (2015a) 等至性と複線径路. 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編) TEA 理論編——複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ. 新曜社, 30-34.

安田裕子 (2015b) 分岐点と必須通過点. 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編) TEA 理論編——複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ. 新曜社, 35-40.

安田裕子 (2019) TEA (複線径路等至性アプローチ). サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真美 (編) 質的研究法マッピング——特徴をつかみ, 活用するために. 新曜社, 16-22.

Zittoun, T., & Gillespie, A. (2015) *Imagination in Human and Cultural Development*. NY: Routledge.

Zittoun, T., & Gillespie, A. (2016) Imagination:

Creating Alternatives in Everyday life. *The Palgrave Handbook of Creativity and Culture Research*. Palgrave Macmillan UK. 225-242.

Zittoun, T., Valsiner, J., Vedeler, D., Salgado, J., Gonçalves, M., and Ferring, D. (2013) *Human Development in the Life Course: Melodies of Living*. Cambridge: Cambridge University Press.

Zittoun, T., & Valsiner, J., (2016) IMAGINING THE PAST AND REMEMBERING THE FUTURE. *Making of The Future: The Trajectory Equifinality Approach in Cultural Psychology*, edited by Tatsuya Sato, Naohisa Mori, Jaan Valsiner, Information Age Publishing, Incorporated 3-19.

(受稿日: 2020. 12. 1)

(受理日 [査読実施後]: 2022. 2. 17)

Original Article

New Theoretical Developments in Trajectory Equifinality Modeling Based on the Semiosphere and Imagination Theory

MIYASAHITA Taiyo ¹⁾, KAMIKAWA Taeko ²⁾ and SATO Tatsuya ³⁾

(Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University /

The Japan Research Institute, Limited / The Institute for Societal Values in Future Generations ¹⁾/

Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University ²⁾/

College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University ³⁾)

This study contributes to the theoretical development of trajectory equifinality modeling (TEM), a fundamental method included in the trajectory equifinality approach (TEA). TEA is a methodology based on semiotic cultural psychology. In this paper, we have considered Valsiner's field-like sign, Lotoman's semiosphere, and Zittoun's imagination theory as concepts that can help refine our analysis of the bifurcation point (BFP) in TEM. We integrate the basic concepts of TEM—namely, the obligatory passage point (OPP), the BFP, and the equifinality point (EFP) — with the semiosphere and imagination theory. We conceptualized the conditions under which signs function as signs in the semiosphere as a systematic setting and semiotic protocol. Also, we defined the signs that trigger fluctuations in existing settings and protocols as a promoter sign of genesis. Then, we present an imagination model of TEM in the semiosphere. This model incorporates the newly defined concepts and demonstrates the transformation of an OPP into a BFP. We also organize the TEM research by focusing on the relationship between the semiosphere and research subjects and demonstrate how TEM can be used to examine individual temporal transition and inter-individual transition across the semiosphere.

Key Words : semiosphere, imagination, systemic setting, semiotic protocol, promoter sign of genesis

RITSUMEIKAN JOURNAL OF HUMAN SCIENCES, No.44, 49-64, 2022.
